

大空への鎮魂

第 27 号 平成 26 年 (2014) 6 月 10 日

特定非営利活動法人
旧陸軍桶川飛行学校を語り継ぐ会
発行者 臼田 智子

新ホームページ
<http://www.okegawa-hiko.jp>

桶川市もついに動き出しました。昨年秋、民間調査会社に作成委託した整備基本計画案が6月に提出されるため、これを市で調整後に一般市民に提示してパブリックコメントを得て、最終的な市の方向を決めることとなります。また、この6月議会では、復元のための建物の構造、部材など詳細調査のための予算を上程しました。一方、本会の仲介で、1月に工学院大学の建築学教授の意見を伺い、4月には、日本の戦争遺跡研究の第一人者に現地を視察していただきました。いよいよ、では、当事者の桶川市ではどうするのか、の段階に入りました。本会と市では、この秋、遺跡の意義と保存活用をテーマにしたシンポジウムを開催する予定です。



昭和 20 年 4 月 5 日正午、黄色又は黄土色から戦闘機のように暗灰色に塗り替えられた九九式高等練習機 12 機は、隊員 12 名、整備兵 1 名、整備員 5 名を乗せ、多くの同僚、住民に見送られて鹿児島県知覧基地に向け飛び立った。使用機は、特攻命令が出たあと熊谷本校や兄弟校の分教場から練習機をかき集め、3 日前に 12 機揃った。写真上：別れの盃（さかすき）背景の森は泉福寺

解説 練習機を灰褐色に塗り替えて (事務局)

<九九式高等練習機>

第 79 振武隊は、歴史上初めての練習機を使った特別攻撃隊である。同隊の出撃は4月16日だが、10 日前の6日に、誠隊第 36、37、38 の3 隊が同じ機種の 98 式直協で少なくとも 26 機、宮崎県の^{にゅうたばる}新田原基地から出撃しているものの、練習機としての位置づけはされていない。桶川分教場（昭和 18 年から「桶川教育隊」と呼称）での操縦訓練は、95 式乙 I 型中間練習機（「中練」。通称「赤とんぼ」）により単独飛行ののち、宙返り、上昇反転など、ひと通りの飛び方ができた後は、九九式高等練習機（通称「高練」）を使って訓練していた。いずれも練習機なので、赤みがかった黄色又は黄土色に塗装してあった。

中練は常時、12、13 機はあったようであるが、高練は、必要なときに随時、熊谷本校から持ってきて使っていたと思われ、教官クラスには馴染み深い飛行機で、整備員たちの高練の前での記念写真も残っている。

高練は、「98 式直接協同偵察機」（「98 式直協」）を改造したもので、基本的な機体構造は 98 式直協と同じで、高練は後部座席にも操縦席と連動する操縦装置が取り付けられ、武装が取り外されたのが大きな違いである。桶川で特攻機に仕立てるにあたり、特攻に不要なものを取り外すことなどは 12 機揃える段階でなされ、知覧での出撃時には 250 キロ程度の爆弾を搭載したと思われる。

3月27日に特攻命令が出たあと、隊員たちは、熊谷本校をはじめ、あちこちの飛行場に高練を受領に行く。佐藤新平『留魂録』によれば、「3月28日……部隊長とともに熊谷へ飛行機を受領に行く」、同30日「午前8時、灰山に飛行機受領に行く」、4月1日「午後、



名称・性能	数値、規格等
発動機	ハ - 13 甲
馬力	515Ps
全幅	11,80m
全長	8,92m
全高	3,64m
自重	1247 kg
最高速度	349 km/h
航続距離	約 1,000 km
爆弾搭載量	250 kg

飛行機受領に航空士官学校に行く」とあり、行く先々で、元同僚、元の上官に出会い、懐かしく感じ、また、激励もされてくる。田中富太郎の手記には、「3月28日…十時、命により、本部連絡の(ため)直協にて、中隊長と本部に飛ぶ。この飛行機にて特攻をするのかと思うと懐かしさを覚ゆ」とある。特攻に、直協を改造した練習機を使うことの感想はない。あちこちの教育隊で教官をしていた隊員たちである。高等練習機(直協)の性能は知り尽くしていたと思われる。それまでの特攻がどんな飛行機を使っていたか、知っていたのか、考えなかったのか、特攻機としての性能は?…それ以上の感想を述べることは、関係者が健在している現時点では避けておきたい。

なお、終戦まで勤務した整備員によると、昭和 20 年 5 月以降、飛行学校が北海道に移転してから、残留の隊員たちは赤とんぼで特攻訓練をしていたという。

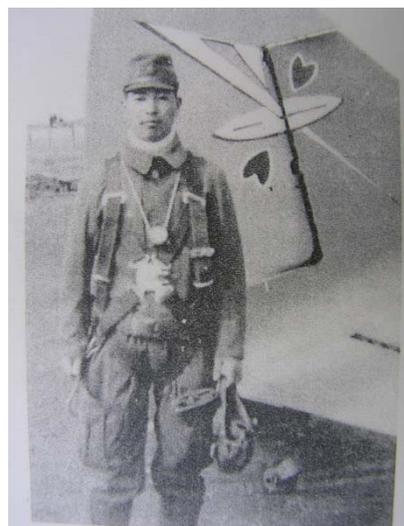
柳井政徳元整備員の証言によると、12 機そろった飛行機に、隣の川越市から塗装業者を呼んで機体を塗装し、尾翼に 79 振武隊の部隊標識を描いたという。塗装の色は現存するモノクロ写真では明らかではないが、出発時の写真からすると、ゼロ戦のような緑系の色というより、「灰褐色」「暗灰色」のような



左：マークは、「79」の文字に桜の花びらをあしらった。
(清水義雄隊員)

灰色又はねずみ色に近かったのではないかと推測される。

昭和 20 年 4 月 5 日正午、桶川飛行場を一斉に離陸した特攻機



柳井さんが同乗していった山本研一隊員（副隊長）

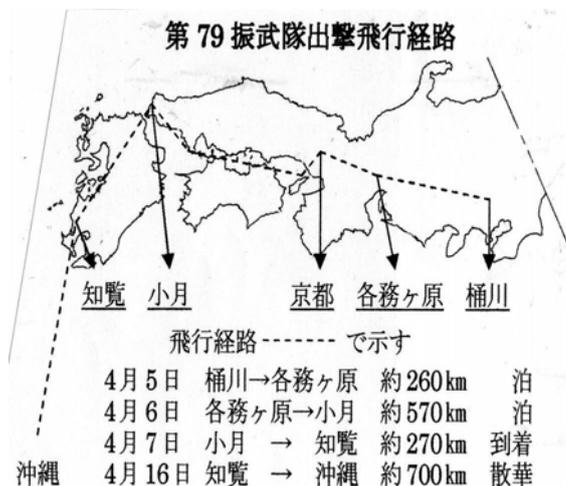
12 機は上空で編隊を組み、超低空で飛行場上空に進入し翼を左右に振って別れを告げると、堤防や橋の上に集った大勢の人たちが日の丸の旗や手を振って見送った。それは、一糸乱れぬ編隊が西の空に見えなくなるまで続けられた。昭和 20 年 4 月 16 日、第 79 振武隊は知覧基地から出撃したが、制海権、制空権ともに連合軍に握られ、完璧な防禦陣が形成されていた中に、遮二無二突入したのである。

第 79 振武特攻隊員が残したもの（その 15）

第 79 振武隊に同乗して

元整備員 柳井政徳

戦況がいよいよ険しくなってきた昭和 20 年 4 月、特攻隊員 12 名が知覧から出撃することになった。その整備のため、私たちが 99 式高等練習機に同乗するように言い渡された。指名されたのは、整備担当の藤原曹長と整備員



5名であった。隊長の訓示、別れの酒の後、12機のうち6機の後部座席に乗り込んだ。特攻隊が出撃することは秘密のはずであったが、噂を聞きつけて周りの堤防の上には、見送りの人たちが来ていた。12機は、荒川の上流に沿って北に向けて次々に飛び立った。眼下には冬枯れの薄茶色の地面の中に、黒く蛇行する荒川が見え、荒川の太郎右衛門橋の上ではおじいさんらしき人が大きな日の丸を振り、ほかにも数人が手を振っているのが見えた。旋回して戻り、飛行場の上空を飛んで見送りの人たちに左右の翼を振って別れの挨拶をしたのち、編隊は西の空に向けて飛んでいった。

数時間後、全機とも無事、岐阜の各務ヶ原(かがみかはら)飛行場に着陸。明日のフライトに万全を期して夕方、町中の旅館に宿を取った。特攻隊員も同じ旅館だった。入浴と食事を済ませ、整備員たちが話し込んでいるところへ若い特攻隊員が一升瓶を提げてやって来た。私よりひとつか二つ歳上の隊員だった。「いろいろお世話になりました。一献汲み交わしましょう」という。私たちは快くお受けしたが、あまりうまい酒ではなかったように思う。戦争に行つて



左：編隊飛行する第79振武隊

(昭20.4.5 同僚を見送った村田勇馬氏提供)

(備考1)「振武隊」とは、西日本にあった陸軍航空部隊第6航空軍指揮下の特別攻撃隊の名称で、九州本土から沖縄に向けて出撃した特攻隊をさすもので、沖縄が陥落した4月以降は「振武」

死ぬのは当然と思っていた当時、私はどんなことを思ったか、今思い出すことはできない。一泊して翌朝、小月飛行場(山口県下関市)に向かった。

私は京都出身の山本少尉の飛行機に同乗したが、京都の町に入ったとき、大きな煙突だったので風呂屋だと思いが、2階の物干し台の上で家族らしい人たちが大きく日の丸を振っていた。私の飛行機は驚くほど超低空飛行で煙突の周囲を2、3回旋回し、翼を大きく振って別れの挨拶をした。学徒出陣で、学生からいきなり特別操縦見習士官1期生として入隊して将校となった22歳の青年が、故郷の空をどう思うか、胸中を察するには余りある。

小月飛行場に着いた私たちは、翌朝、試運転を終わって飛行機を隊員に引き渡した。アクセルをふかした飛行機の爆音の中、山本少尉は車輪止めをはずし終えた私を操縦席脇に呼んだ。

「柳井、世話になったな。整備班に帰ったら、皆によろしく伝えてくれ」

私たちは列車で帰ってきたが、隊員たちは鹿児島県の知覧基地に向かい、記録によると4月16日、第79振武隊として沖縄の海に散ったということである。

桶川から飛び立ち、知覧から出撃した12人の寄せ書きが、今も知覧の記念館に残されている。桶川から特攻隊が出たのは、私が記憶しているのは1回だけで、その後あったとは聞いていない。
(本会理事)



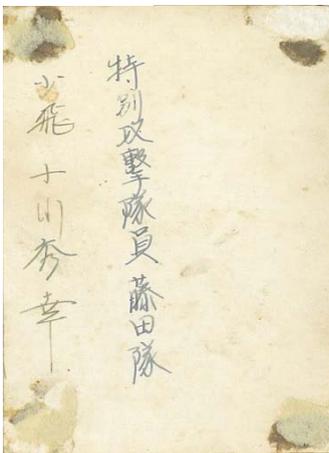
柳井政徳 元整備員
桶川市の隣、北本市在住で、現在飛行学校で解説活動している。

の文字は使っていないと 327 隊の中村さんほという。ちなみに、台湾から沖縄を目指した特攻隊は第 8 航空軍に属し、「誠」の文字が当てられて「誠第〇〇隊」と言った。

(備考 2) 桶川で特攻訓練をしていた特攻待機部隊は、会報第 26 号で紹介したように、この 79 振武隊のほか、「94 振武隊」「325」「326」「327」「328」の、少なくとも 5 つの待機部隊が駐留していたことが判明しているが、訓練段階では、この番号のあとに「飛行隊」をつけて「79 飛行隊」というように呼んでいたようである。4 月以降は、「振武」ではなく、「一心隊」とか「神鷲隊」というようなニックネームも使っていたという。

前号 25 号、26 号で紹介した第 94 振武隊 (隊長 藤田一慶少尉)の隊員の写真見つかる！！

写真裏面



昨年秋、鳥取市にお住いの少飛 17 期山田和義さんから、「私は昭和 20 年 5 月ごろから桶川飛行学校に整備兵として駐留していました」という手紙をいただきました。

20 年 5 月以降に少飛 17 期生が来ていたことは分かっていましたが、関係者が見つからずにいましたので、急いで照会状を差し上げました。伺った内容は次号以降に掲載します。

その中で、会報第 25 号に掲載した、返歌をくれたという藤田一慶少尉率いる第 94 振武隊(隊員名は 26 号に記載)に属していた小川秀幸さん(当時伍長)と校内で言葉を交わし、写真を手渡されたことが分かりました。裏面に「藤田隊」とあります。

まったく初対面で、翌日どこかに飛び立って行ったということです。戦後資料によると、ここから熊本県の黒石原に向かったのですが、いつ出撃命令が出る分からない状況下において、本人はすでに思い詰めた心境ではなかったか、誰かと言葉を交わしたかったのではないかと推測されます。

少飛 17 期山田さんと 15 期乙種小川さんは同じ昭和 18 年 10 月入隊で、同期生意識があったものと思われます。乙種は、1 年間の基礎教育課程が省略されるため、専門課程では 17 期と同時期になります。山田さんは、「向こうから訪ねて来た」といいます。

69 年ぶりの 再会



山田和義さんは、当時、飛行学校で経理事務をしていた細野あき子さん(当時は旧姓「山田」と、姓が同じという親近感から、何度かあき子さん宅に遊びに行った。和義さんが長崎県で働いていた戦後も 2 年くらい文通していたが、あき子さんの父兄の反対で途絶えてしまったという。中央の 2 人。現地で解説している柳井さん(左)天沼さんと(26.4.5)

戦争遺跡保存全国ネットワーク代表

山梨学院大学 十菱駿武教授が飛行学校を視察

4月5日、市内のNPO法人野外調査研究所（吉川國男理事長）の招きで、戦争遺跡保存全国ネットワーク代表で、山梨学院大学の十菱駿武(じゅうびし しゅんぶ)客員教授が桶川飛行学校を訪れました。本会の事務局鈴木と市役所の折原自治文化課長が説明にあたり、後日、次のようなコメントをいただきました。昼食をはさんで小野市長とも懇談し、この秋に桶川飛行学校に関するシンポジウムを開催する方向で合意しました。

<数日後に先生からいただいたメール(抜粋)>

(市が作成した)『旧若宮寮跡地の歴史と現状調査資料』に云われているように、①飛行学校の建造物が群として残っている国内唯一の戦争遺跡であること、②木造建築でありながら保存状態は良好で、修復をすれば十分保存活用が可能であること、③桶川飛行学校を語り継ぐ会の活動により、当時の飛行兵の記録や証言がまとめられており、戦争の記憶の復元が十分できることで、基本構想A案のように建物群を史跡指定し、地域住民の活動拠点、平和教育の拠点として、速やかに文化財指定すべきものと思います。(以下略)

戦争遺跡保存全国ネットワーク共同代表、山梨学院大学客員教授 十菱駿武

(注)「基本構想A案」とは、本年1月に市に提出された工学院大学の宮澤健二教授(建築学)の意見書のうちの3つの活用案のうち、もっとも大きい構想のこと。

夏の戦争展は、記録映画上映のみ

今年の「平和のための埼玉の戦争展」8月2日(土)～4日(月)は、記録映画「熊谷陸軍飛行学校桶川分教場」の上映のみとします。展示はしません。浦和駅西口前コルソ7階ホール 事務局は3日午後行きます。



4月5日現地を視察した十菱駿武教授(右)
左は吉川國男氏。69年前の特攻隊出発の日

<編集後記>

今年4月、NHK 沖縄の記者から、沖縄の海に沈む米駆逐艦工モンズを撃沈したと思われる九八直接協同偵察機(98直協)の残骸を撮影したので、この機種を整備したことのある本会の柳井政徳元整備員に映像を見てほしいと依頼がありました。2日後、柳井さん宅でその映像を見る柳井さんを撮影し、感想を求めたところ、「九八直協だと思うが、こんなのを見せられたら、気の毒というか、涙が出ちゃうね…」

4月24日に沖縄地方のニュースで、特集「海底に眠る戦跡」と題して放映されました。26日早朝には全国放送もありましたが、こちらでは、柳井さんの映像はありませんでした。映像は、飛行学校現地でDVDによりお見せすることができます。(S)

[発行]

特定非営利活動法人

旧陸軍桶川飛行学校を語り継ぐ会

会長 臼田 智子

(法人住所) 桶川市西2-4-21 会員 130名

[事務局] 〒350-0133 *お手紙は事務局に

埼玉県比企郡川島町表403(鈴木)

電話(携帯)090-2554-7429

入会は郵便振替 番号 00120-8-297950

年会費 2,000円振り込みを。

名義「旧陸軍桶川飛行学校を語り継ぐ会」

通信欄に「入会申込」と記入。できればコメントも。振込料不要の用紙希望は電話かHPからのメールで。

会報「大空への鎮魂」

年4回 250部発行。

会のホームページ: www.okegawa-hiko.jp